ジュラシック・トーク

仙台市の新しい音楽ホール

仙台市では国際的な音楽コンクールも開催されていますから、そこは「楽都」などと呼ばれ、あたかも「音楽の都」のような気持ちにさせられることもあります。しかし、その実態はそんな立派なものではありません。なんと言っても、この街には、世界に通用するスペックを持った音楽ホールが、全くないのですからね。

そのスペックというのは、

1 .クラシック音楽に適した音響設計が施されていること

2. 収容人員が 1000 人を超えること

3. パイプオルガンを備えていること

という３項目です。2.に関しては、ホールとしてはこれで十分ですが、外国のオーケストラなどを招く時には、2000 人以上でないと採算が合いません。

このようなスペックを持つホールは、東京のサントリーホールやオペラシティなど、全国の主要都市にはほぼ必ず存在しています。ところが、東北地方最大の都市である仙台市には、それがないのですよ。先ほどの音楽コンクールが行われる会場は、2.と 3.が満たされていませんし、最初から音楽ホールを目指して改修工事が行われた川内萩ホールでは、残念ながら 3.がありません。

ですから、仙台市は、音楽ホールに関しては全くの後進地、とても「楽都」などとは恥ずかしくて呼べるような状況にはありませんでした。上記のスペックを持った音楽ホールの建設は、まさに仙台の音楽ファンの悲願だったのですね。

当の仙台市はと言うと、かなり前から新しいホールを作る動きは確かにありました。何度も音楽関係者の意見を聴く場を設けたりしていましたし、数年前には建設用地もほぼ決定していました。そして、今年の１月 30 日に、その用地に作られる新しい音楽ホールの具体的な内容が発表されたのです。

まずは、そのことを伝える新聞記事です。

仙台市・新音楽ホール計画案

舞台囲む客席配置も

仙台市は30日、青葉区青葉山に整備する新音楽ホールの大ホール（２０００席規模）を公演内容に応じ、客席が３６０度取り囲む舞台と、客席と向き合う一般的な舞台に切り替え可能にする基本計画の中間案を公表した。市によると、同様の方式を採るホールでは国内最大規模となる。

中間案によると、客席が取り囲む舞台は仙台フィルハーモニー管弦楽団をはじめ、オーケストラによるクラシック音楽の公演を想定。聴衆は指揮者の表情を見ることができ、演奏者との一体感も楽しめる。客席と向き合う舞台はオペラやバレエのほか、ポップスのライブにも活用する。

舞台は客席と音響反射板を出し入れする形で切り替える。国内には大分県佐伯市のさいき城山桜ホール（約９００席）の例がある。

市青葉山エリア複合施設整備室の佐々木裕一郎室長は「２０００席規模では初の取り組みで話題性もある。（県が宮城野区に整備する）新県民会館とのすみ分けも図れる」と狙いを説明する。

市は新音楽ホールの整備に関し、民間資金を活用する社会資本整備（ＰＦＩ）ではなく、設計と施工を別々に発注する分離方式を採用する方針も明らかにした。ホールは東日本大震災中心部メモリアル拠点との複合施設で、市が２０３１年度の開館を目指す。

河北新報

朝日新聞

仙台市の音楽ホール サラウンド型を計画

舞台のまわりを囲む観客席

仙台市は30日、2031年度の開館をめざす新音楽ホールについて、観客席が舞台のまわりを取り囲む「サラウンド型」に転換できるようにする計画を発表した。ホールは2千席規模で、転換可能な施設としては国内最大級だという。仙台フィルハーモニー管弦楽団が本拠地とすることも明らかにした。

市が基本計画の中間案を公表した。音楽ホールは大小二つつくり、小ホールを350席程度とすることも計画に盛り込んだ。サラウンド型に転換できるのは2千席規模の大ホール。普段は観客席が舞台と向かい合う劇場型だが、観客席と一体となった可動式の壁などを設置し、公演に合わせて変形できるようにする。

市の担当者は「舞台上の演奏者と観客の一体感がより増すほか、正面からだけではなく横からや後ろから見られて色々な楽しみ方ができる」と説明。県が仙台市内に整備を進める複合施設のホールとの「違いにもなる」とみているという。

音楽ホールは仙台市地下鉄東西線の国際センター駅（青葉区）近くに、震災メモリアル拠点との複合施設として整備を進めている。施設全体で指定管理者を置くこともこの日、示した。「高い専門性を持つ人材が重要」などとして、公募によらない形で指定管理者を選ぶ方針だ。

市によると、複合施設の建設工事費や設計費などは現時点で約350億円を見込む。駐車場の整備や音響設計、備品購入などの費用は含んでいないという。

どちらの記事も、ステージのまわりを囲むように座席が配置される、というようなことと一緒に、その配置の一部を変化させて、舞台芸術用にプロセニアム（額縁のような仕切り）を設置したステージに変えることもできるのだ、ということが書かれていますね。なんか、すごいものが出来そう、という気がしてしまうのですが、ただ読んだだけではいまいちその具体的なイメージがわかないのではないでしょうか。
そこで、河北の記事にある、大分県の「さいき城山桜（しろやまさくら）ホール」というところが実際にどんな風になっているのか、そのウェブサイト（https://sakura-hall-saiki.com/）で確かめてみました。

さいき城山桜ホールは、1971 年に開館した佐伯文化会館の老朽化に伴い、その後継施設として建設がすすめられ、2020 年 10 月に完成しました。これが、ホールの全景です。館内には大小 2 つのホールがありますが、屋根が高くなっている部分が、大ホールのステージの上なのでしょう。

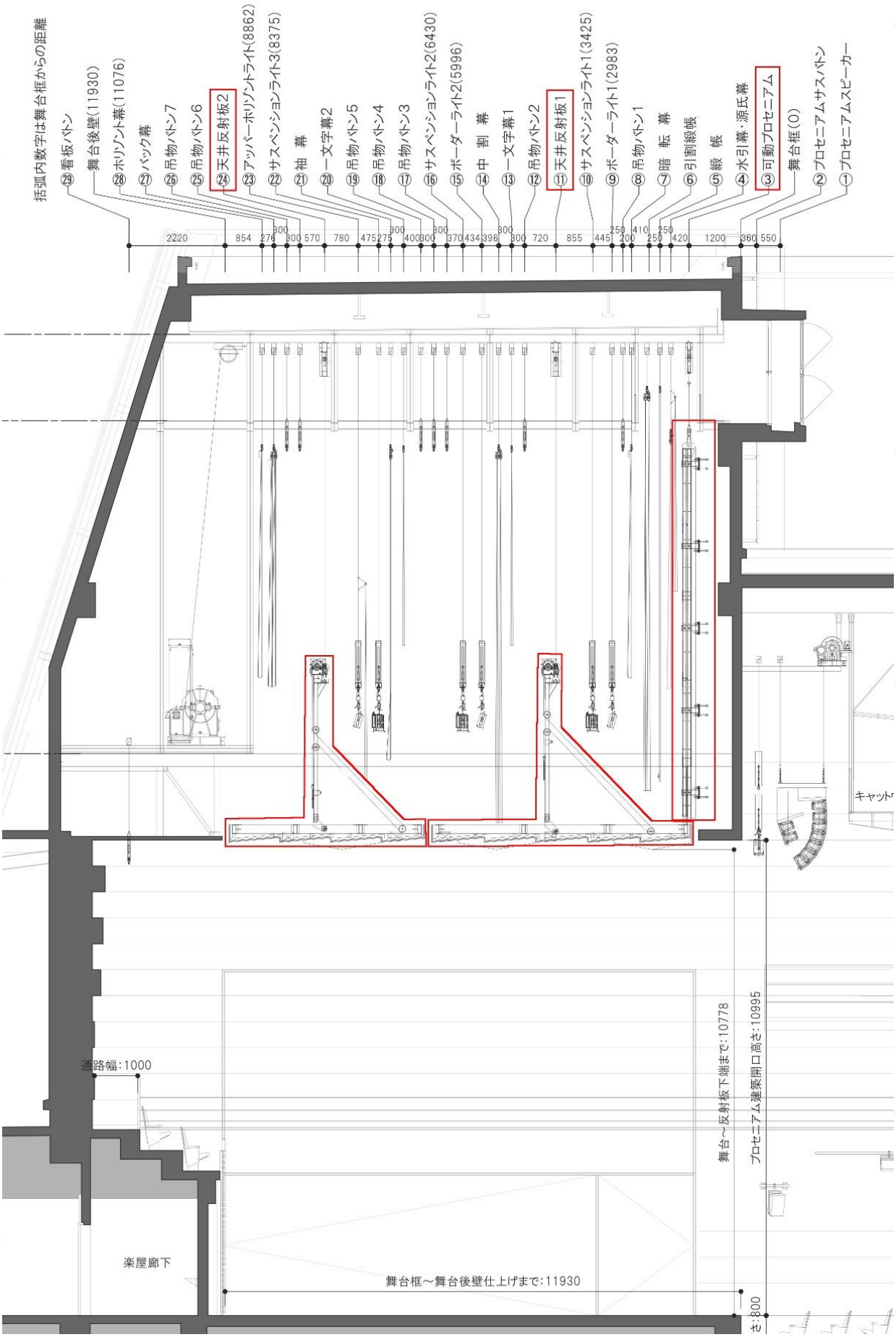
そして、その大ホールの内部です。まずは、記事には「サラウンド」とか「360 度」とかありますが、要するに「シューボックス・タイプ」の音楽ホールモードです。

それを、ステージの上から見たアングルです。
客席は可動式になっていて、収納できますから、スペース全体をアリーナとして使うこともできます。

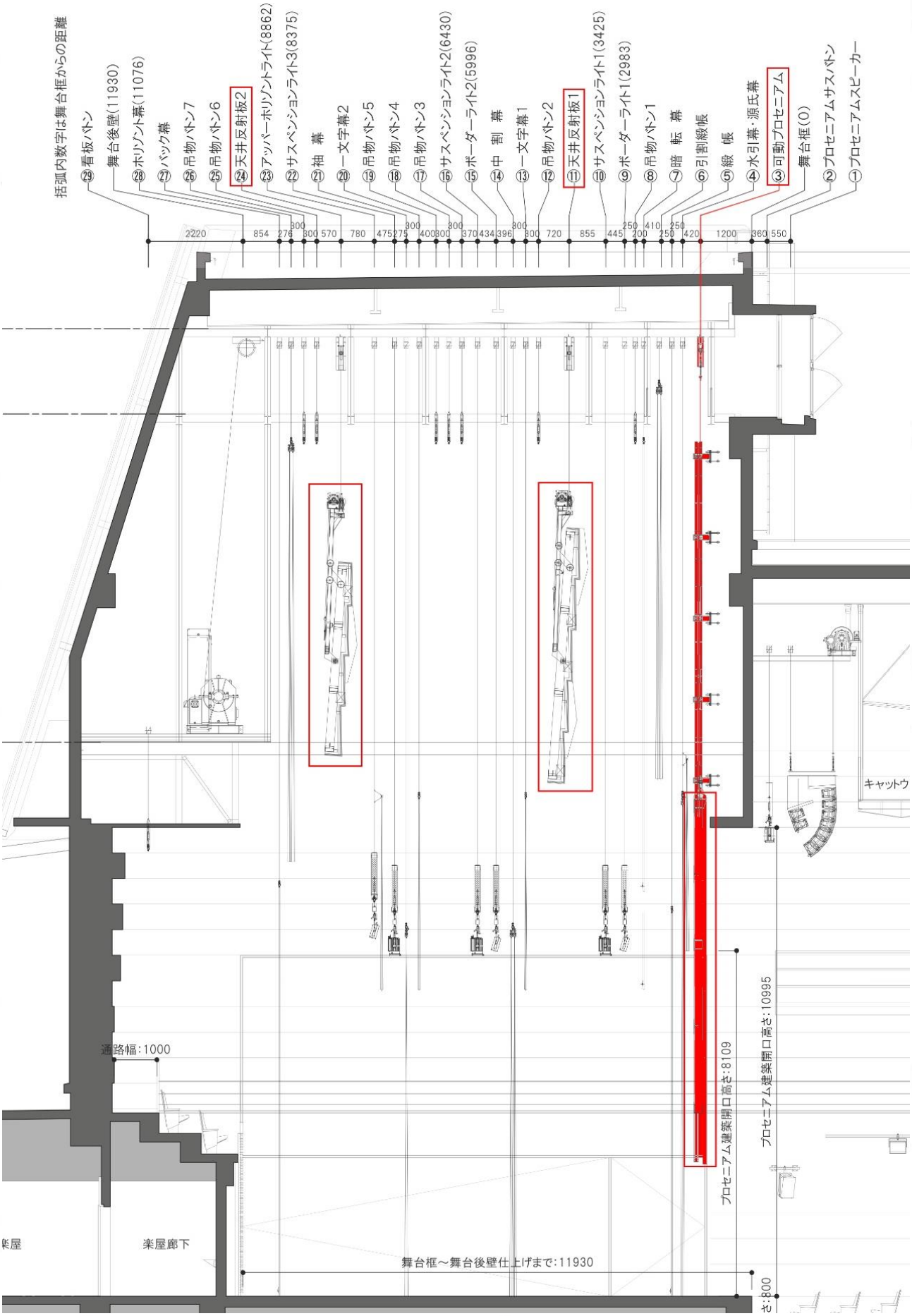
さらにこれが、プロセニアムで客席とステージの間を隔てた劇場モードです。

つまり、このホールでは、コンサートホールとしてのシューボックスタイプだけでなく、これまで一般的だったいわゆる「多目的ホール」で採用されているプロセニアムタイプと、さらにはアリーナにもなるという３つのモードに切り替えられる構造を持っているのですね。確かに、国内、国外を問わず、こんなことができるホールなんて初めてなのかもしれません。
とりあえず、アリーナは別にして、プロセニアムとシューボックスとの切り替えは、どのようにして可能になったのでしょう。
ステージの上は、普通の多目的ホールのように上に広がる空間（「フライズ」と言います）があるのですが、そこにプロセニアムの壁もぶら下がっているのですね。左のページの写真では、それは見えませんが、ステージの上の天井も実は上からぶら下がっていて、プロセニアムが必要なときは、それが２枚に分かれて垂直になります。そして、開いた天井の部分から、この写真だとピアノと客席の間あたりにプロセニアムが降りてくるのですよ。同時に、ステージの上手と下手の壁が後ろに折りたたまれて袖との境目がなくなり、前の部分の一部は内側に向けて折られます。そして、その上にプロセニアムが乗っかり、上の写真のようになるのですね。

次のページには、このホールのステージの断面図の実物（これもサイトにありました）を掲載してあります。それによってそのあたりを実際に確認してみましょう。

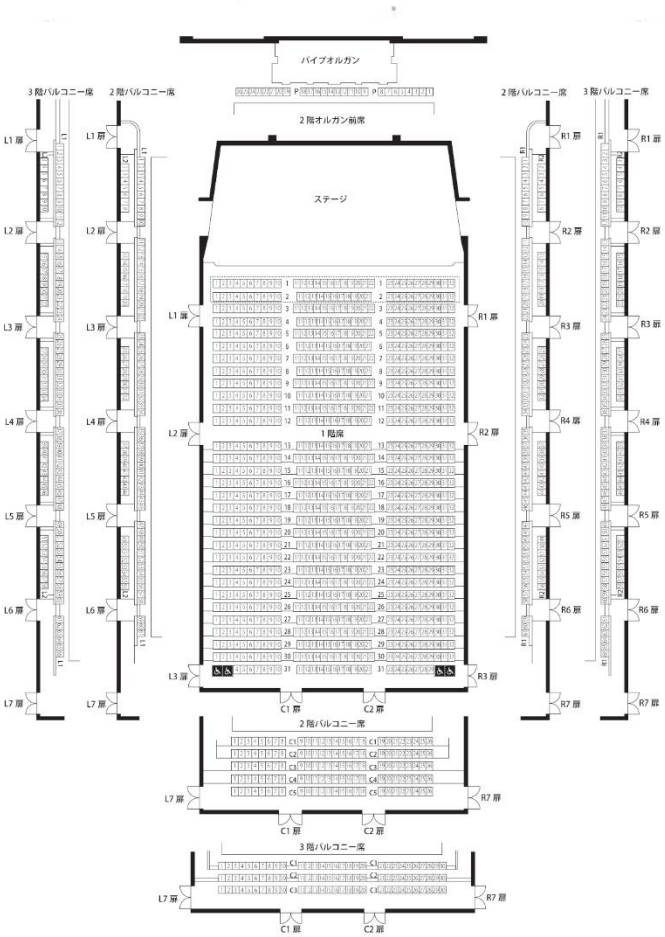


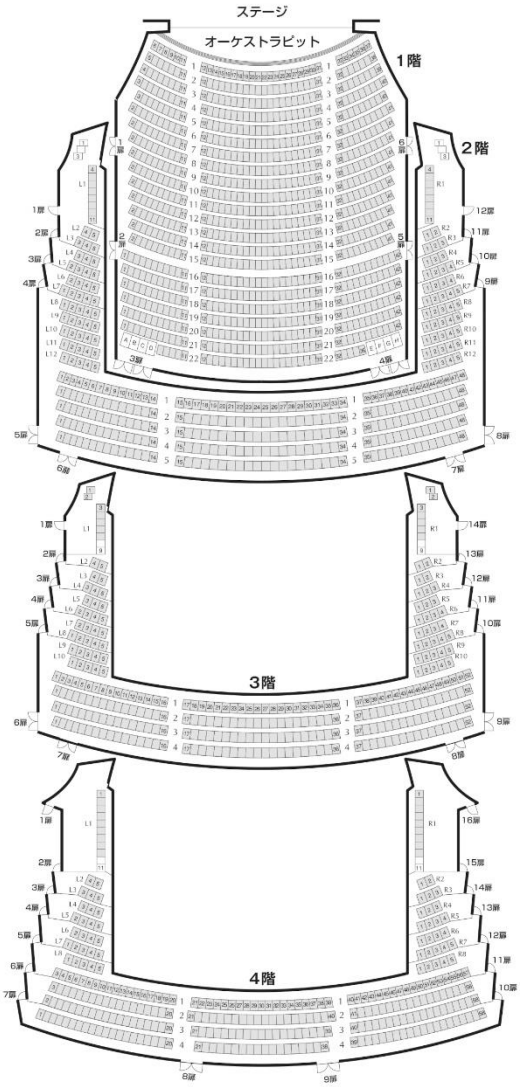
これが、「シューボックス・タイプ」。つまり、「音楽専用ホール」の時の断面図です。ステージの上に天井反射板がかぶさって、客席の天井とつながっています。



これが、「プロセニアム・タイプ」。天井反射板は畳まれて上に上がり、プロセニアムや照明機材が降りてきます。

いやあ、なんともすごいものが出来ていたのですね。これよりももっと規模の大きいものが、それこそ「日本で初めて」仙台市に出来るんですよ。興奮しますね。
と、あくまで建築的にはすごいなあ、とは思うのですが、でも、なぜそこまでしなければいけないのか、という疑問は残ります。「音楽ホール」としては、そんなことなどしなくても、このシューボックスのままでいいじゃないか、という疑問ですね。というか、最近では、音楽ホールというのは、サントリーホールやミューザ川崎といった、ワインヤードと、東京オペラシティのようなシューボックスのどちらかだというイメージがかなり一般的になっています。プロセニアムタイプというのは、同じ音楽ホールでもあくまで「オペラ」に特化したホールなんですよね。
ですから、本当にそれが分かっている人たちは、コンサートホールとオペラハウスを別々に作ります。さっきの東京オペラシティが、まさにそのような実例ですよね。下の画像はコンサートホール（左：シューボックス）とオペラハウス（右）の内部と座席表です。

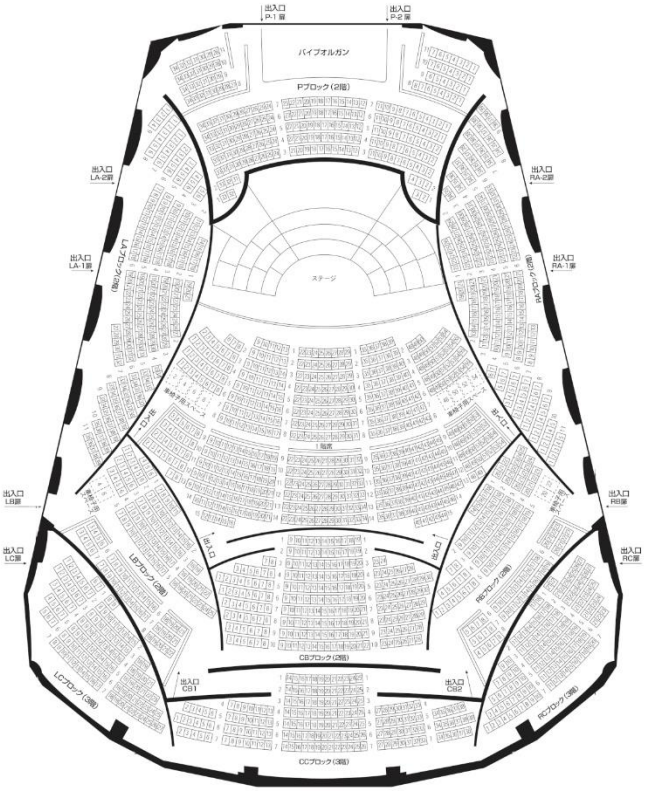


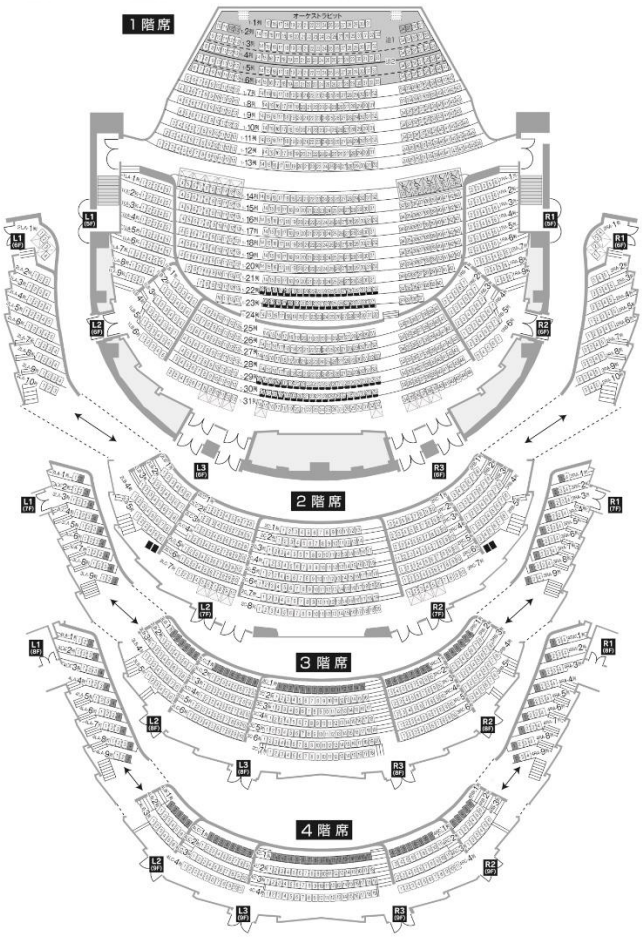


東京に限らず。札幌にだって、KITARA というコンサートホール（ワインヤード）と HITARU というオペラハウスがあるじゃないですか。なぜそうしたか、というと、同じ音楽ホールでもその 2 つは、もちろん、ステージの構造が全く違いますし、さらに音響設計でも残響時間の設定で全く別のことが要求されるからです。

KITARA

HITARU





仙台市の資料によると、このホールのコンセプトはこういうことなのだそうです。

○「ホールが楽器」と言われるような、生の音源の響きに対する優れた音響性能を有するとともに、演奏者と聴衆が一体感を感じられるよう、舞台と客席が融和した音楽空間として魅力的なホールとする。

○舞台の音響反射に係る設備は可変とし、視認性に優れ、オペラ・バレエなどの多彩な舞台芸術公演が可能な「プロセニアム形式」に転換できるホールとする。

○客席は 2,000 席規模（固定席）とする。

○生の音源の響きに対する音響性能の実現という視点を最重視し、この視点において望ましいホールの空間容積を確保するとともに、舞台形状、舞台設備、客席構造等の検討にも最先端の技術、最高度の知見を結集し、これからの時代を牽引し、国内外から高い評価を獲得できるホールを目指す。

仙台市は、同時に、コンサートホールとオペラハウス双方の要求を満たす大ホールを作ろうとしています。しかしその実績は日本では 900 人収容の中ホールしかありません。さらに、冒頭のスペックの 3 番目、オルガンについては全く述べられていませんね。「ホールが楽器」というのは、オルガンがあってのことなのに。